

小冊子（講演を文章化したもの）



1997年から2002年にかけて福岡市で開催された教育関係の講演記録です。講演は約3時間ですが、講話の部分を一部文章化しました。

当時の福岡での協力者によって、以前よりテープ起こしの原稿は出来ていましたが、出来るだけ多くの方々に手に取って読んでいただけるようにとの思いから、今回新たに竹下氏により編集し直したものを冊子化しました。（現在編集途中のものも、今後追加していきます）。

子育てを通して得られる智慧により、家庭、学校、職場での様々な人間関係の問題も解決できるようになります。本当の自分は何か、どう生きればよいのかということの参考になると思います。この小冊子をご希望の場合は、ユニティ・デザインまでご連絡ください。有償で頒布しています。詳しくは[アクセスサイト](#)をご覧ください。また、[アクセスサイト](#)には同じものを掲載しており、無料でダウンロード出来ます。自由に何冊でも印刷して、ぜひお知り合いの方にも差し上げていただければと思います。

【子育て】 子供たちの心を感じられますか（1）～（6）：全6冊

【教育】 思春期の親子関係（1）～（4）：全4冊



【著者プロフィール】

竹下雅敏（たけしたまさとし）

1959年神戸市生まれ、広島県在住

子育て、人間関係、宗教学、自然療法など、幅広いテーマの講演活動を行っている。

監修図書「幸せを開く7つの扉」ビジネス社

豊かな心をもった自立した人間を育てるために

アクセスサイト：<http://www.unity-design.jp/jiritsu.html>

発行：ユニティ・デザイン

お問い合わせ：TEL&FAX 0823-22-8832

子供たちの心を感じられますか（4）——7歳までの子供との関わり方——

今回は、7歳までの子供との関わり方を中心に話します。7歳までが子育てや教育の急所です。この時期までの子育てがわかると、後の子育てはとても簡単になります。ちゃんと育てると反抗期というのは全然ないものです。反抗期というのは3歳前後で始まりませんが、多くの大人が子供の反抗期で手を焼いてしまうのは、子供の独立要求という「自分が大人と同じようなことが出来るんだ」という意志表示をするその気持ちを大切にしないで、「お前はわがままだ」という風に見てしまっただけで叱ってしまう、すると子供が反発するので、一見反抗期に見えるのです。ですからそういう時期に、きちんと子供を誘導出来るものが見方が出来ればいいのです。

ところが、それ以前の愛情の要求をちゃんと満たしていないと、正しく導くことが出来ません。ではどこが発点になるかというと、実は子供がお腹の中にある時です。これは大変な問題です。というのは、時間をさかのぼればさかのぼるほど、時間の密度が濃くなるからです。お腹の中にいる10ヶ月間というのは、こ

絆をちゃんと作ってから生まないといけないのです。

ちゃんと育てるということは、十分に愛情深く育てる、簡単に言えば十分に抱くということです。子供を育てる時の急所は、これでもかという位抱くことです。子供が起きている時はずっと抱いているという位に抱くことが大事です。これは猿の実験などで証明されています。猿にも偉い母親とそうでない母親がいて、愚かな母親は子供を全然抱かない上に、子供の餌まで取っちゃうんです。その母親に育てられている子猿は、本当に貧相で可哀想な顔をしています。いつもイライラしていて、おどおどしてる。ところがもう一方の偉い母親は、いつも子供を抱いている。子猿はいつも母親にしがみついている、顔が全然違う。情緒が安定していて、落ち着きがある。それを見ても十分わかるんですけど、科学者というのは見ただけでは満足しないで、血液を採取してその血液中の成分を調べてみました。すると、セロトニンという物質の量が全然違うということがわかりました。脳内物質のセロトニンが多いほど心が落ち着いているということですが、それが倍以上違うんです。科学者は「3歳までにセロトニンの量が決まってしまう、それ以上は増えない」と、恐ろしいことを言っています。私はそうは思っていないくて、

映像配信している竹下氏の講演テーマは大きく分けて5つあります。

会員登録していただくと、有料コンテンツ（1本1時間ほどの講演が525円）をご覧いただけます。普通にインターネットの操作ができる方であれば、簡単に会員登録と視聴ができます。無料コンテンツや試聴映像をお試し下さい。なお、ネットが混み合う夜よりも朝昼の時間帯の方が快適にご覧いただけるようです。

視聴代金は、1ヶ月分をまとめて、翌月初めに明細をお送りして、郵便振り込み又は代引きでお支払い頂いています。詳細は映像配信のページをご覧ください。

《テーマ1》 家族の絆 [連続講演]

夫婦関係そして親子関係がしっかりしていて家族の絆が深い家庭は、どんな逆境も必ず乗り越えられます。しかし単なる経済的なパートナーであるような夫婦だと、夫が職を失ってしまうと、家族はばらばらになってしまいます。男性が家族より仕事を優先するような価値観は、いやがおうでも変えさせられるような世界の状況になっていきます。正しい優先順位は、第1が夫婦、次が子供、そして友人。仕事はずっと下です。

〈家族の絆～親子(1)～より〉

サブテーマ)

親子(親子関係)、夫婦(夫婦関係)

《テーマ2》 宗教学講座

この講座では宗教を科学的な視点から精密に霊的な科学として捉え直します。そうすることで、あらゆる宗教のある意味での一致点と相違点が明確になってくると考えています。仏教、キリスト教、神学、ヒンドゥー教の哲学、サーンキヤ・ヨーガなど、それぞれの世界観がどう違うのか、言葉を正確に定義して、同じものは同じと捕まえて、宗教の全体を理解することを目指しています。

〈初級コース第1回より〉

サブテーマ)

初級コース(中級上級は順次開講予定)

番外編:ダ・ヴィンチ・コードの真相

《テーマ3》 チャクラと波動、祈り方

人間の身体には重層的に高次の身体があり、その神経中枢がチャクラと呼ばれています。チャクラの活動は、その方の意識と密接に関係しており、いわゆる「波動(意識の高さの尺度)」を計るセンサーとしての機能もあるそうです。

インドに伝わるガヤトリー・マントラは、ガヤトリー女神を讃え智恵を授かることをお願いするマントラです。このマントラを使った除霊と浄化の祈りなど、心身の浄化と波動を高めるための様々な方法を竹下氏が解説します。

《テーマ4》 東洋医学講座(雑談集)

この講座は、中国医学、インドのアールヴェーダ、アロマセラピー、ホメオパシーなど、代替医療を統合する医療理論を学ぶ講座です。テキストとDVDで販売してきましたが、受講生の方に講座の中の雑談が好評で、4期行われた講義のうち教材にしていない映像から雑談部分を再編集して公開します。

《テーマ5》 ホツマの神々

日本神道に伝わるホツマの神々について、最近起こった事をお伝えします。

したら豊かな暮らしが出来る。それが幸福だ」と教えている。でもだれも幸福になってないですね。これが問題なんです。私は教育が完全に誤っていると思います。人間を孤立させて不幸にするためにやってるんじゃないかという気がするんです。ですから私が子供に伝えたいことというのはそういうことで、算数とかそういうことではない。じゃあ子供が算数とか出来ないかというところなことです。私は勉強は何にも教えないんです。ところがこの前に、1足す3は4とかやってるんです。3引く2が1とか1引く1は0と自分で勝手にやってる。それで私が、「とも君、1引く2はいくら？」と聞いたら、「マイナス1」と言う。私はグツと思つて、「1引く3はいくら？」と聞くと、「マイナス2」と言う。私は星ひゅうまじやないですけど猛烈に感動しましたね。ノートを見たら9引く10はマイナス1と書いてある。双六ですつと遊んで、そういう知識まで身につけている。これは勉強は教える必要ないですね。子供は勝手に学んでいくんです。それよりはもっと大切なことを教えてやること、それが私の言いたいことです。

(講演 1998年11月1日 1999年4月18日 福岡市)

〓〓この小冊子の内容は、転載、引用自由です。〓〓

らえない時は、お父さんに覆い被さつて来て「肩車して」と言う。私は肩車をしたことなんか一回もないです。最初の一年半十分に抱いて育てると、後がとても楽なのです。後が楽だからそうするんじゃないかと、それが大切だからそうしているのです。すると本当に落ち着きのある子供に育ちます。うちの子供が5歳か6歳の時にテレビで小学校の授業風景を見て、凄いショックを受けていました。「僕はあるなにうるさい所に行きたくない」と言う。今は小学校に入ってるんですけど、「授業で先生がうるさい」と言っていました。どうしてかと言うと、生徒がザワザワ言つて先生の話を聞かない、だから先生はつい大声で喋る、それがうるさいんです。彼にとっては辛いでしょうけど、それぐらい他の子と違うのです。

非常に心身が安定していて落ち着きのある子供と、そうでなくていつもソワソワしていて落ち着きがなくて人の話が聞けない子と、どっちが頭の良い子になるのか考えてみてください。私の言う頭の良いというのは、聡明とか賢明という意味なのですが、勉強ができるかどうかという視点から見ても、授業で先生の話を中心にちゃんと聞いて、何を言っているかを理解出来ればそれで終わり、家に帰ってから何にも勉強する必要はありません。家では遊べばいいんだから、この方が

れから上位とか下位とか、人と競争することが無意味であることを教えたい。人間がどういう時に幸福を感じるかというと、万物との一体感を感じている時だと思いませんか。例えば、子供が幸福感を感じるのは、母親に抱かれて母親との一体感を感じてる時なんですね。恋人同士が本当に幸福だと感じるの、手を握ってお互いのことを感じてる時なんですね。ですから今を感じること、同じ場所にいる人と一体感を感じるその体験のことを幸福と言います。そうすると、これをどんどん拡大していくと人間に限る必要はなくて、花とあるいは山と自然と一体感を感じられる人が居るでしょう。それを感じ取れる人ほど幸福ですよ。こういう人は大体詩人と言われる人達です。だから子供にもそれを理解してもらいたい。それを妨げるのは何かというと、差別感なんですね。あの人は愚かだとか、自分と彼らは違う、自分は上位で彼らは下位だとかいうその差別感です。差別感があると一体感を感じられない。すなわち不幸になっていく。ところが教育から何から、差別感を植え付けることばかりをやってるんです。そうすればするほど孤立していくんですね。人間は幸福から遠ざかっていくんです。

私が子供に何とか伝えたいと思っているのは、全ての人間は本質的に平等だ、本当は勉強はとても楽しいものです。学ぶという楽しさを知っている人は一生学び続けます。ところが小さい頃から無理矢理勉強させるから、勉強が嫌になるのです。疲れ切っている。大学に行ったらこれで解放されたと思って全然勉強しない、社会に出ても勉強しない大人になる。そういう人と、学ぶことの楽しさを知って一生勉強し続ける人とは、後にどんなに差がつくことでしょうか。

文字や計算を教えるより、もっと大切なことを教えないといけない。それは、ちゃんと人の話が聞けるということです。学校で教師の話をきっちり聞ける子供というのは、とても頭が良くなるものですよ。どうやってそういう子に育てるかというと、親が子供の言っていることをちゃんと聞かないと無理です。親がちゃんと聞く姿勢や態度を示さないといけない。なぜなら子供は親と同じ様に振る舞うからです。そういう風に育てようと思ったら、今の生活は忙しすぎて、親にゆとりが無さすぎる。親が生活に追われていて、子供の話をゆったりと聞く時間が無いんです。「何してるの、ぐずぐずしないで早くしなさい」という生活です。そうやって育てられると、子供は、「自分はグズだ、のろまだ」と思います。そのうち「自分は無能だ、馬鹿だ」と思うようになる。すると本当にそうなる

を育てることが出来れば、それを克服できる。そして子供をちゃんと育てられるということなんです。それで彼女は本当に変わりましたよ。この10年でものすごく変貌しました。子供もそれに連れて変貌して、本当に自分は大切にされている」と感じるようになってる。この一年位で、「本当にとも君って、とても良い子だ」とうちの妻が言っんです。そういう言葉がよく出るようになった。言えと言う程子供は自信を持ちますね。そうしたら、マウンティング行動がほとんど無くなってしまうんです。この前「とも君、お母さんに大切にされるとかされないとかは、順位とかと全然関係ないだろう」と話すと、「ない」と言っていました。一応これである程度までは成功したかなと思うんです。

うちでは文字とか算数とかは一切教えないで、子供の興味に任せています。聞いてきたら教えるくらいです。それより人間としてもっと大切なことを教えたい。子供が、「ねえお父さん、日本人でも貧しい人っているの？」と聞いたんです。「いるよ、お父さんとお母さん、うちが貧しいんだ」と。そして「うちがとても貧しい家庭だ」って答えました。そしたら子供が驚いてましたね。それで私が「やりとして、」「ここが問題なんだ。とも君、うちは貧しいんだ、だけど不幸か？」

感じて遊びを止めて、お母さんの方にすっと抱かれに行くんです。私が妻に話しかける言葉を発した時には、もう子供は母親の所にいて、しがみついているんです。これはほとんど超能力です。これは武術の達人と同じことをやっています。武術の達人というのは、攻撃しようという気を先に感じる、そして先回りをして防御するんです。子供も同じで、私が妻に話しかけようとする気を読んで、おもちゃで遊んでいてもぱっと抱かれに行く。話し始めたら必ず子供が間にいるんですから。ところがだんだんと言葉を話せるようになると、そういう能力が少しずつ薄れていきます。私が母親の方に気を向けて話し始めますね。子供はそこで気づいて、「ねえ、ねえ、ねえ、お母さん、新幹線てねえ」って、どうのこうのと話を中断しに来るんですが、もう遅れています。もはや武術の達人じゃなくなっている。私と妻が仲良く話しているのが気に入らない、母親を取られては嫌だから必ず割ってくるんです。子供というのは、母親の心がどっちに向いているかいつも知っている。お父さんが母親の方に気を向けたら、ぱっとわかっちゃう。それが三歳位でそうなんですから、一歳とか半年だと、お母さんは私を抱っこしている、だけれど全然心は別の所に向かっていると、わかっているんです。これじゃあ

だろう。だから嫌われないんだ。その秘密は簡単なんだ。お母さんがこうして欲しいなという時に邪魔しない、お母さんが食事を作ってる時、お父さんは邪魔しないよ。だからお母さんはお父さんのことを嫌いにならない。それはお父さんが上位だから好いてくれるんじゃないんだ」と話したんですね。「だからとも君が上位だろうが下位だろうが、とも君がお母さんのことを思って、お母さんがこうしたら助かるなと思ってやったら、お母さんはとても君に感謝する。そしてらももっとも大切にしてくれる」と、そう話したんです。そして「お前、とてもお母さんに大切にされてるんだよ」と話したんです。子供に「自分はお母さんに本当に大切にされている」というそういう自覚が出来た時に、こういう問題は消えていくだろうと私は思ったんです。

テレビで他の家庭の様子や学校の様子、他の子供の様子とかを見たりして、子供は自分がどれくらい他の家庭と違って本当に大切にされているかということがだんだんとわかってきたんですね。それと同時に妻が自立してきて、精神的に成熟してきたんです。これは大体同時に並行的に起こりました。うちの妻はアダルトチルドレンだった。それが結婚して10年経つんですけど、精神的にもすごく

ている、これは自分が間違っている」と思って、子供を大切にしようと思っかしてあげれば、子供の不安も解消できて素直になるんですけど、普通はそうは受け取らない。「この子はわがままだ」と思って叱るんです。親が「本当にわがままだ」とか「グズだ」とか「悪い子だ」とか言うのと、本当に悪い子にどんななるんです。それを子供が本当に愛情を要求しているという風に受け取って、母親が改心して十分に愛情深く育ててやると、子供はいい方に変わっていくんです。

子供は母親が本当に喜ぶということを、よくやってきているものです。ここを絶対に見逃がさないことが大切です。母親が洗濯物を片付けていると、そばでは子供が子供なりに片付けています。それは母親からは散らかしてる様に見えないものですね。でもそこでちゃんと意を汲んで、「ああ、この子は私がやっていることを手伝ってるんだな」と思って、「ありがと」と言ってるんです。そしたら子供はどんどんと手伝うようになる。そして母親や父親にこういう風に聞いたりします。「ねえねえ、お母さん、こつやつたらお母さん助かるっ」、「凄く助かるよ」と言ってる。母親も、「この子は思いやりのある子だな、優しい子だな、人のことが気遣える子だな」と思うでしょ。思えたら隣同士で世間話しているよ

本当に大切にされて育てられてないんですよ。だからうちの妻にも、心の中に、“本当に自分を大切にしてもらいたい”というのが深くある。私がどんなに大切にしても、妻が、“私はこの人に大切にされてる”という自覚が生まれるまでは、どうしても私の方に妻の気持ちがあるんです。子供は2番目なんです。これはやっぱり子供にはわかるんですよ。「お父さんと僕だったら、お母さんは明らかにお父さんの方が好きなんだ」と思うんです。私がコタツに横なってリラックスしているとしますね。うちの妻が暇になったら、私の隣に来るんです。子供の隣に来ないんですよ。私の隣に来て休むんです。そしたら子供は間を割って入ってくるんです。これをいつもやってる。すると子供は、「お母さんは僕よりもお父さんの方が大切なんだ、好きなんだ。なぜか」と、お父さんの方が上位だからだ」と思うんです。これが子供の論理です。それでマウンティング行動をして、自分が上位になれば良いんだと思う。それでマウンティング行動が止まないんだという事に気づいたんです。なるほどそういうことだったのかと思って、妻が風呂に入ってる時に子供に、「とも君はどうしてマウンティング行動するの?」と聞いたら、「わからない」と言う。やっぱり子供にもわからないんです。本能でや

ります。「これは悪い食べ物だから食べてはいけない」と言ったら、子供の意志が育たないんです。そうではなくちゃんと説明して、子供に選ばせないといけません。そして子供には簡単な判断の方法を教えました。食べるもの、水でも何でもいいですが、比べさせてみるのです。非常に良い水と水道の水がある。良い水の入ったコップを持たせて、「とも君、ちょっと持ってください」、「次に水道の水の入ったコップを持たせて、「これ持ってください」、「どっちが体が楽?」といつも聞くんです。良い水を持つと呼吸がとても深くなります。腹まで息が吸える。悪い水を持つとどのあたりまでしか息が吸えなくて、浅い呼吸になります。凄く簡単ですよ。皆さんもやってみて下さい。だからその食品が良い物か悪い物かはとても簡単に判断できます。手に持ってみて息が深くなったら、ああこれは良い物だとわかる。子供にいつもそうやって判断させています。食べさせないわけじゃない。「食べてもいいよ」と言っんです。その代わり「ちゃんと調べてもらおうかな?」「こっちはいい」「と選ばせてこっちは食べさせる」というようにしています。味の違いがわかるようになるから、まずい物は食べなくなる。「食べちゃいけない」と言ったら自由意志を侵害することになります。必ず子供に自分で選

が上位なんです。ここが問題なんですね。ここが全ての答みたいなものなんですよ。中学生で今一番のステータスって何かわかりますか。これがわかる人はちょっと子供の心がわかるかも知れないです。凄く簡単で、友達が何人いるかがステータスです。これは裏を返して言うと、どれほど孤独を感じているか、寂しいという思いを常に心に抱いているかということですよ。だから一緒に写真を撮って、2、3分話をしただけで仲のいい友達だと思ったりする。そんな写真を一杯持っていて沢山友達がいる人は人気者です。これは凄い世界です。逆に言うと、その位彼らは苦しんでいる。本当に自分のことをわかってくれる人がいなくて寂しいという叫び、心の飢えで苦しんでいる。ところが親とか教師が全然それをわかってなくて、トンチンカンなことばかり言っています。私が言いたいのは、それは子供の時から寂しい思いをさせて育てたからだということです。自分が独りぼっちで、誰にも相手にされないことがとても辛いということの意味しているわけです。だから子供にとっては友達が沢山いるということがステータスになる。

自分は家庭で家族に大切にされているという満足感がない。そういう満足感がある子は悪い子にはならないものです。そこへ持ってきて明らかに妹の方が大切

きました。多分県の方に聞いたんでしょう。電話がかかってきて、「一応校則と云うのがあって団体生活を学校では学ぶということになっている。学校で制服と云うのを決めている訳ですから、是非団体での生活を学ぶと云う意味で、制服を着用していただきたい」と言う返事でした。私はそれを聞いて、「ということは着用義務は無いんですね」と聞いたら、「無いんです」と。要するに「学校の校長先生とか教頭先生と話合って、制服を着なくて良いという許可が得られた場合は、私服でも良いんですね」と聞いたら、「そうです」ということをちゃんと取りつけておいたんですね。「こういう親がいる」ということは、多分学校に連絡が行っていたんでしょう。私が行ったら、制服を自分で作って綿でも良いという許可が出て、割と簡単でした。「電話かけといて良かったなあ」と思いました。初めて妻は本を見ながら制服を作ったんですよ。ミシンで悪戦苦闘してました。制服が出来たのは入学式の一日前でした。ポリエステル製の制服はちゃんと買ってある。そして妻が作ったのをちゃんとアイロンかけて、子供に二つを見せて、「とも君、持ってごらん」と、綿の制服を持たせて、次にポリエステル製の制服を持たせて、「どっちが楽?」「こあちが楽」と選ばせる。もう全然違うんです。

お父さんを追い抜いてやろうと思うんですね。それでやっぱり私が横になると、しょっちゅうマウンティング行動をとる。甘えてくる振りをして乗ってくるんです。それに気づいて私は寝ながら」とも君、今何してるの？ お前はそうすることで自分が上位だと錯覚してるだろう。それは錯覚だよ」とよく言うんです。また私が横になって寝ている時に、子供が股を開いて仁王立ちみたいな形を取って、上から見下ろす時があるんです。それで「お前、何してるんだ」と言います。絶対に止めるとか言わないんです。ただ何をしているかを自覚させるだけです。そしたら子供が、「上位への錯覚」なんて言ってる。「そうだよ、錯覚なんだよ」と。本当に可笑しいんですけども。要するに私が子供に伝えたいのは、人間には本当は上位とか下位とか無いってことです。大人と子供のどっちが生命力が強いかわからないし、本当の意味で偉いかもわからない。上位とか下位というですよね。私はそれを伝えたい。だから、「一応お父さんが上位ということにこの家ではなってるけど、これは錯覚だ。お前が上位だと思ってるかも知れないけど、それも錯覚だ。本当のところはそれは無い」ということをいつも話して聞か

靴を履かせたことはありません。しかも3歳位までは、大体裸足で歩かせていたんです。まだ福岡にいた時に、子供が靴下だけはいてちょこちょこ歩いていたら、お爺さんがそれを見て、「これはええことやっちゃん」と誉めてくれましたけどね。健康のためには靴を履かない方が良いに決まってるんです。

小学校では通学用の靴や校内で履くバレーシューズまで全部決まってきました。これはやっぱり掛け合わないといけない。「うちの子は草履しか履いたことが無いんだ。通学の際は靴を履くようになっていくけど、うちの子が草履が良いと言ったらそれでも良いか」と聞いて、草履を履いて学校に行くことの許可も取りつけました。大変ですよ。本当に父親の労力は倍になります。だけど子供の意志を尊重するということは、子供に選ばせることなんです。どちらが良いかを自分で考えさせて、僕はこういう理由でこっちが良い、だからこうすると判断させる。こうすれば問題は起きないし、とても意志が強い子に育つのに、学校では、制服はこれ、ポリエステル製の体操着を着用すること、バレーシューズを履くって、何から何まで決めている。学校のものの考え方というのは、子供の自由意志や個性を全く尊重してないように思います。「これからは個性を尊重した教育をします」

ことで、子供は下位の役にまわって、食べ物をもらいますね。しばらくして、「本当は上位も下位もないんだよね」と言ってるんです。そうやって、「あらゆる生命は、本当は上位も下位もないんだ」ということを私は教えたいと思ったんです。子供は「生き物地球紀行」といった動物の番組が好きなんですが、「お父さん、蛇ってすごく偉いんだよね」「イルカって凄い偉いんだよね」って言っているんです。「ものすごく偉い、多分人間より偉いかもしれない」と私は言います。子供は、動物とか虫といった存在を、自分と同じものとして受けとめていて、自分が犬や猫、イルカや蛇、昆虫よりも上だとはどうも思っていないらしいんです。この間なんかは、「手乗り蠅とり蜘蛛」と言ってる遊びをしました。「お父さん、蠅と蜘蛛って偉いんだよね」と言うから、「多分すごく偉いと思うよ」と話しました。私は、あらゆる生命は平等だと思っています。イルカや熊などの動物も、人間よりすごく偉くて、ただ言葉が通じないので私たちにはああ見えているだけで、話をしたら、ひよっとしたら人間を遙かに凌駕する精神性を持っているんじゃないかと思うことがあります。すべての生物は同じである、上も下もない、ただ役割として上か下かを演じているのではないかと感じています。もう少しわかりや

もちゃを買ったんです。上から玉を降とすと、くるくると羽車が回ってポトンと落ちて、カラカラと階段を下りてくるんです。「ああ、来た来た！」と子供が言っていて、子供と私でそれを組み立て出した。妻は部品が揃っているか確認してみた。そうしたら足りない部品がある。これは一度返品して、全体を交換してもらわないといけないのです。「あれ、これ足りないわ」「えっ、じゃあ返品かー。とも君、これは部品が足りないから、返さないといけない。返してまた送ってくるまでもう一週間位かかるよ」と話しました。子供は「もう遊べる」と思ってるわけじゃないんですけど、普通の子なら、わーっと泣き出すと思います。ところが全然泣かないんです。全部物を納め出すんです。そういう風になる。ですからいつも子供の心をちゃんと理解して、上手く誘導してやると、後が楽ですし、その方がちゃんと意志が強くて、思いやりのある子に育つのです。

今度は、子供が反抗期の5歳、6歳、7歳位になると順位争いをするようになって、詳しく話してみたいと思います。これはとても大事なことです。人間というのはどんな人もいつも順位争いしているのかも知れなくて、本能的なレベルで

です。するとシェパードは食べるのを止めて、残りの分を全部ボスが食べちゃうんです。これが犬の社会です。ボスだから沢山食べて当たり前だと思うんです。なぜならばボスは強くなければならない。そして群を統率しないといけない。だから食べないといけない。人間の社会もそうなっていますね。「俺には能力があるんだ、だからこれだけ儲かって当然だ」ってやっているでしょ。でもそれは違います。本当に強い人間というのは、自分が質素な暮らしをしても、他の人を豊かにしようと思うはずです。「自分は才能があるから、年収が何億何十億稼げて当然なんだ」と言っていないながら、隣の国では飢えている人がいるわけです。それで平気なのです。これはボス犬が部下にワンと言って、自分の取り分を取るのと全然変わらないです。みんなそういう弱肉強食といった思想に取り憑かれている。子供も同じで、7歳までは考え方が犬あるいは猿なんです。自分の方が上だと思いと、強い者が沢山取って当たり前、ボスだから沢山餌をもらっても当たり前だと思うんですね。子供というのはそういうすごい錯覚をします。わが子がまだようかんが食べたそうだから、親は食べたいのを我慢して子供にあげる訳でしょ。思いやりの心を育んでもらいたいと思って愛情からそうするわけでしょ。ところ

れでもわからない。3ヶ月位観察してみて、やっと気づき出した。この理由がわかるのに3ヶ月かかりました。あの時まではとても良い子だった、あの辺から急にこんな風になった。何があったんだろう、私が何か間違ったことをやってないかとずっと思い出すんですね。思い当たることがない。それでもジーンツと意思出している、ああ！と思いついたことがあって、そういえばあの頃から子供と駆けっこをして遊ぶようになったということ思い出したんです。家の外に出て10メートルか15メートル位しか距離はないんですけど、そこで、どっちが早いか走ろうってかけっこをしたんですね。全力で走ったら絶対に親の勝ちですよ。息子は5歳ですから、普通親心として誰でも負けてあげるでしょ。「ああ、とも君は駆けっこ早いねえ」と、大体5回に4回は負けてあげていた。すると子供は自分の方がお父さんより上だと錯覚し始めたんです。それまでは散歩しても絶対に私より前には歩かなかったです。常に同じか少し後ろを歩いていました。けれど駆けっこやって私が負けるようになってから、2、3メートル前を常に歩くようになったんです。初めは私もそれに気付かなくて、勢いがあったって元気になったなあ位にしか思っただけです。その頃から奴の態度がおかしくなりだしてき

私が勝つのに、それを負けてやっていたんだということを教えてやらないといけない。そのうちだんだんと、子供が「これはどうも、私が本当にわざと負けてやっていたんだ」ということに気づいてきます。そしてら駆けっこしようとか言わないし、何かしようとか言わなくなりました。意気消沈して元気がなくなってしまうんです。これもまた困るんですが、1週間くらい放つといた。そうすると子供の方から「どっちが早いか駆けっこしよう」と言ってきました。「よっしゃ、やるうか」と言つと、「本気でやらん」と言つと、「言つんです。」えっ、本気でやったら俺が勝つだろ、どうするんだ」と言つと、子供の方から、「勝たん」と言つと、「それじゃあ、どっちが勝つの?」と言つたら、「とも君が勝つ」「お父さんがわざと負けるのか?」「うん」「まあそれなら良いだろう」と言つて、わざと負けてやるんです。それで満足している。こういうことを結構やりました。そして、子供もお父さんが本当にわざと負けているんだということがわかってくる。

そしてある時に私は子供に話をしたんです。「お前なあ、本当に強いというのはどんなことかわかっているか、それはな、自分よりも弱い人に負けてあげられる人なんだ、勝ちを譲れる人なんだ。これが本当に強いということなんだ。だから

人であり、人間が部下なんです。だから犬を調教する人は、絶対に犬を人間より先に歩かせないです。人間より先に歩かせないことを学ばせてはじめて、人間が上、犬が下という上下関係が出来る。そうすると犬は、この主人は俺よりも上だと思つて、犬は主人の言うことを必ず聞きます。それで、「これだ、これだっただ、これはわからなかった」と思いました。

猿の場合はマウンティングという行動があるでしょ。雄の上にボスの猿が乗る行動をします。私が座つてしていると子供が背中から覆い被さつて来るようなことをします。これは自分の方が上だというマウンティング行動です。それまでは絶対に私の上には乗つてこなかったんです。私が横になっている時、子供を抱っこして私の体の上に乗せますね。すると子供はスツと嫌がって逃げていたんです。ところが駆けっこに負けてあげるようになってから、私が横になって寝ていると、私の上に乗るかろうとするんです。一見甘えてるように、お父さんが寝ている所で遊んでいるように見えるんです。ところがこれがマウンティング行動です。俺の方が上位だという行動ですね。犬と同じで下位だったら腹を見せるわけですから。上に乗るっていうのは俺が上位だというメッセージで、これはマウンティ

